御杣始祭、裏木曽御用材伐採式にて「三ツ緒伐り」で檜を奉伐
御樋代木奉迎送に沸く各地

6月3日、神宮式年遷宮にて、御神体を納める器となる「御樋代木」を山から伐り出す「御杣始祭」が、長野県上松町の木曽谷国有林で行われました。立派に育った檜の大木2本に、斧を入れるのは地元「三ツ紐伐り保存会」と神宮式年造営庁の職員からなる杣夫たち。「三ツ緒伐り」という伝統の技法で、丹念に斧を打ち込み、最後に「いよいよ寝るぞー」のかけ声がかかると、檜は「ぎぎぎー」と音をたてて、“寝かされ”ました。

6月5日には岐阜県中津川市の裏木曽国有林にて、「裏木曽三ツ伐り保存会」と神宮式年造営庁の職員により、上松同様に2本の檜が奉伐されました。

御樋代木は「御神木」や「御祝木」とも称され、長野県、岐阜県、そして愛知県の各地に立ち寄り、伊勢へ。沿道には大勢の人が駆け付け、20年に一度の貴重な光景に喜びが満ちあふれました。

1.上松町の木曽谷国有林にて。3方向から斧を入れる「三ツ緒伐り」／2.中津川市加子母の裏木曽国有林。内宮・外宮の2本の木が襷掛けにて倒される

奉曳本部役員や各奉曳団代表等が浜参宮で身を清め御樋代木奉迎奉曳

5月25日、御樋代木奉曳行事に先立ち、「浜参宮」が行われました。奉曳本部役員や各奉曳団代表ら約400名が白い法被姿で参列。奉祝木遣りを合図に夫婦岩表参道約1キロを歩き、二見興玉神社で無垢塩祓を受け心身を清めました。この浜参宮は、令和8年と9年に予定されているお木曳行事の前にも、行われる慣わしとなっています。

6月8日には、外宮の「のぼせ車」が盛大に行われました。この日は約1300名が自分たちのまちの法被等で参加。まずは子どもたちが中心となって綱を曳き、「エンヤ」のかけ声で元気に練り。辺りが薄暗くなると、曳き手は奉曳団の若手を中心とした大人に交代し、奉曳車を度会橋のたもとへと勢いよく運びました。

6月9日には、伊勢へと到着した御樋代木をそりに載せ、五十鈴川を遡り内宮へと曳き入れる川曳が行われ、3本の御樋代木が神宮職員などの曳き手により、内宮へ運ばれました。

6月10日は、伊勢へと到着する御樋代木を奉曳車に載せて外宮まで曳く陸曳です。10日の午前、宮川に架かる度会橋に御樋代木を積んだトラックが見えると、待ち構えていた市民からは喜びの声と拍手が上がりました。その後、御樋代木一本にしめ縄が飾られ、大勢が見守る中、荷締めと飾り付けが行われ、奉曳車が整えられました。午後に出発した奉曳車は威勢のよい木遣りと「エンヤ」のかけ声に合わせ、約400名の曳き手によって曳かれ、約2時間かけて外宮へと進みました。到着後、祓い清められて参道を進んだ御樋代木は、無事、五丈殿に奉安されました。

3. 二見興玉神社で浜参宮／4. 提灯を灯して伊勢のまちを練るのぼせ車／5. 奉曳車の荷締め／6. 清めの雨の中、奉曳を支える梃子方／7. 五丈殿に納められる御樋代木／8. 奉曳に参加したみなさん

お木曳本番を1年後に控え 令和のお木曳フェス 決起の会 開催

助けあう。認めあう。響きあう。

お木曳まで、あと1年。去る5月17日に、お木曳行事への機運を高めようと、50をこえる奉曳団が参加。勇ましく晴れ晴れしい木遣り唄が、伊勢のまちに響き渡りました。

木遣り唄が聞こえると、伊勢人は心が弾みます。外宮の北御門広場のステージでは、参加の奉曳団から33団約350名が登場。子どもから大人まで順に壇上に立ち、それぞれの木遣り唄を披露しました。このフェスは、次の世代に伝統をつなごうと奉曳団の有志らでつくる実行委員会が企画。会場では奉曳団の紹介パネル、お木曳車の展示、采のミニチュアを作る体験もあり、お木曳が待ち遠しくなる1日となりました。

色とりどりの法被姿で会場内は熱気が渦巻き、久々の再会を喜ぶ声があちこちから聞こえました。これこそお木曳ならではの気風です。

参加者の笑顔が印象的なフェス。本番に向け、強い絆で結ばれました。

レポート お木曳にむけてがんばる子どもたち

河崎町旭通奉曳団【かわさきちょうあさひどおりほうえいだん】

奉曳の出発にあたって唄う「本木遣り」を、子どもたちが担当します。昨年9月から週に一度集まり、練習を重ね、揃ってのお披露目はこの日が初めて。少し緊張しながらも、大きな声で唄い上げていました。「祭りに参加することで、たとえ就職でまちを出たとしても、伊勢に住んでてよかった、そんな思い出をつくってほしい」と青年団長の小黒真平さん。そうした仲間を、今後もっと増やしていきたいと語ってくれました。

通町奉曳団【とおりちょうほうえいだん】

木遣りの練習日を月2回設定し、それぞれが参加できる日に集まっています。「うまく唄えると楽しいです」と答えてくれたのは、元気いっぱいの小学生。当日の朝、自分の動画を見て復習し、本番に挑んだ子もいるほど熱心。「前回遷宮のお白石持で経験した子が、中学生・高校生となって青年木遣りに参加しています」と青年部長の中川和人さん。8月にある地区の夏祭りでも、子どもたちの木遣り披露の場を予定しています。

お木曳行事 豆ちしき5

木遣り

お木曳やお白石持に欠かせない役割の木遣りは「エンヤ」の一声で曳き手をまとめ、奉曳を勢いづけます。木遣り唄は元々重い材木や石などを多人数で運ぶ際に、音頭取りがみんなを統率するために唄う労働唄でした。

各団ごとに節回しや歌詞に地域の特徴が盛り込まれていて、それぞれに受け継がれた伝統があります。木遣りが手にする采の形状は様々で、陸曳は紙製、川曳は水に濡れるため木製です。